
幻想の夜に観測される流星と七色の星

ヨシュ@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想の夜に観測される流星と七色の星

【コード】

N9212P

【作者名】

ヨシユ@

【あらすじ】

始まりはとある夕方、天井を突き破ってきたのは待ち望んでいた彼女でした

(前書き)

ブログに書いてあるものの転載です

閉ざされた空間

灯っている明かりの炎は部屋の隅に蹲っている闇を照らせない

冷たい地下室

無機質が満ちるこの部屋

一人ベッドの上に座っているフランドール・スカーレットの目には
光りが無かった

炎の揺らぐ影すら映っていない

ルビーのように透き通っていた紅い瞳は、光りを通さない濁った血
の色をしていた

あの人間がこの私の部屋にやってきたのはいつのことだっただろうか

一週間前？

一ヶ月前？

一年前？

最近は時間の感覚さえ麻痺してきた

酷く眠い

それでも眠ろうとはしなかった

もう誰も来ないこの部屋

レミリア・スカーレットの指示で来る十六夜咲夜の姿すら見るのが
嫌になって扉に「こちら側」からも鍵を掛けた

膝を抱え込む

唇がカサカサに乾く

閉じていた口を少しだけ開くと、ピリツとした痛みが走った

舐めてみると薄く、血の味がした

なんでお姉さまはここから出してくれないのだろうか

今まで何度も考えてきた

あの人間に敗れた後も、なぜ出してくれないのだろうか

ほとんど永遠に近い時間をこの地下室で過ごしてきたというのに

その永遠のような時間で考えれば、何でも答えは出てくる
なぜここに閉じ込められたままなのか

右手を開き、閉じる

ただそれだけで、ベッドの脇に添えられたテーブルに置いてあった
綺麗な硝子のグラスが粉々に砕け散った

「あらゆるものを破壊する程度の能力」

全ての物体には「目」という緊張した部分が存在する

そして、全ての物体はそこを破壊されると無残にも原型が残らない
までに破壊される

この能力は、その「目」を自らの右手に移動させることができる

あとは、それを握りつぶすだけ

「きゅっとしてドカーン」

ただそれだけで、抗うことも出来ずに全てが壊れていく、崩れてい
く、消え去っていく

私に宿る、この能力のせいでここに閉じ込められているのはわかっ
ていた

一体、私はお姉さまにどう思われているのだろうか……

昔、そう考え数年の月日が流れた

見たことがない人間がやってきて、私を倒していった

私はその能力を使わなかった

そう、戦っているときも、まだそのことをずっと考えていたのだ

そして勝負が終わってどれくらい経ったのか、一つの答えに辿り着
いた

お姉さまは、私を疎ましく思っているのではないかと

私が邪魔で仕方が無い

その能力のせいでスカーレットの名に傷が付いて欲しくない

ただ、スカーレット家の荷物だ、と

その答えに辿り着いてからは、もう何もかも考えられなくなった

気力は衰え、妖力も満ちない

全てが気だるくて、何もしなかった

そう、お姉さまは私を邪魔だと思っている

邪魔ダト思ッテイル

ジャマダト……

右手を広げた

その上に光る「目」が形成された

その「目」は、私の「目」

それは他の「目」とも変わり無く、そこに存在していた

これで全部終わる

お姉さまに邪魔だと思われなくて済む

ゆっくりと右手を閉じてゆく

指の隙間から零れる光

目を閉じた瞬間、耳に爆裂音が轟いた

そして、体は吹き飛ばされた

「……………?」

目を開けてみる

あたり一面、木っ端が散っている

天井には赤い空が見えた

さっきの爆裂音は、自らの体の破壊音ではなく、部屋の壊れた音だ

ったのだ

何が起こったのかわからない

確かに私の右手は私の「目」を握っていたのに……

「……………つっう!?!」

と、同時に右手を貫くような痛みが走った

急いでその場所から右手を退かす

見てみると、西に傾きかけた陽光がその場所に光を当てていた

右手を庇いながら、まだ残っている天井のもとに走る

影に蹲って、改めて部屋全体を見してみる

何かが落ちてきたのか、部屋の中央に瓦礫が特に積み重なっている

と、ガラリとその山が崩れた

「あーあ、酷い目にあっちまっただぜ……………」

金髪の少女が這い出てきて、埃だらけになった洋服をポンポンと叩く
そして、瓦礫の山をしばらくごそごそして、黒い尖がり帽子を取り
出して頭に被った

そしてクルリとこちらを振り向いた

少し驚いた顔をした後、ニカツと笑ってきた

「よう、久しぶりだなフラン」

そう、確か彼女は霧雨魔理沙……だった気がする

曖昧な記憶を掘り返す

それでも曖昧な記憶はそのままだった

「……あなた、誰？」

「私か？ そうだな、博麗霊夢、巫女だぜ」

尋ねてみるとそう返してきた

ああ、思い出した、確かに霧雨魔理沙だ

「ちよつとあなた、何しているのかしら？」

頭上から降り注ぐ聞きなれた声

扉越しに毎日給仕に来るメイド長の声

スタッと、上から降りてきた

そして魔理沙の前に仁王立ちする

「毎回毎回、図書館から本を持ち出していたから、そのために仕掛
けたパチュリー様のトラップに引っかけたら今度は妹様の部屋を
突き破って……」

やれやれ、と咲夜が首を振る

大丈夫ですか、とこつちのほうに近寄ってきた

そして、焼けた手を見るなり、あつと声を出して、魔理沙の方を振
り返った

「あなた、妹様を連れてパチュリー様のところに行ってきたさい」

「えー、なんでだよ」

「あなたのせいで妹様が怪我をしたのよ？ 普通だったら貴方に無理
やり治療させるところだけど、あなたには無理だからせめてパチュ
リー様のところに行きなさい」

「しつかたねえな、わかつたよ……よし、フラン行くぞ？」

見上げると、魔理沙がこちらに手を差し出していた

その手を何をするでもなく見つめる

すると魔理沙は少しだけ困ったような顔をして、腰に手をあてて、頭をガシガシと掻いた

よしっ、と一声入れると背中と腰に手を回してきた

突然のことに驚いて、羽をバタつかせて、体を竦める

「イテツ、ちよっとフラン、落ち着けて」

よっこらしよつと、と魔理沙が抱きかかえる

お姫様抱っこも意外と心地がいい

キィ、と地下から地上の一階へと続く階段への扉が開いた

「よー、邪魔するぜー！」

魔理沙が図書館への扉を盛大に蹴り開けて言った

本棚あたりを飛んでいた黒い翼を持った赤い髪の少女は、こちらを見るなり驚いてパタパタとどこかに飛んでいってしまった

階段を下りて、パチュリーの机の前まで行く

机の周りには堆く本が机の上にも下にも積まれている

「貴女が正面から入ってくるなんて、珍しいわね」

その本の塔の中からパチュリーが本に目を落としたまま喋る

魔理沙が一つ、本の塔を足で蹴って倒してしまった

バサドサと音を立てて崩れる音に、パチュリーがため息をついて目を上げた

真っ先に、私と目が会った

そして、パチュリーの息を呑む音、魔理沙のフツツと笑う声

「……なんでここに妹様を連れてきたの？なんとなく理由はわかるような気がするけど」

尋ねながらその視線は顔から庇っている痛む手に移っていった

相変わらず魔理沙は何も言わずに笑っている

はあ、と二回目のため息をついた

「小悪魔、E-9bの7-38にある本、取ってきて」

「ああ、それなら私が昨日借りたぜ？」

間髪入れずに魔理沙がしゃあしゃあと言う

もうパチュリーはため息すらつけないほど呆れているようだ

開いていた本をパタンと閉じる

「妹様、ちよつと手を出して……そう、もうちよつとこつちに……」

机を挟んで、その間に怪我をしている手が出された

黒く焼けた手は、未だに少しだけ燻って煙を上げている

パチュリーはその手を見つめたまま、近場の本の塔から素早く魔導

書を抜き出し、開く

その上に手をかざし、小声で何かを呟く

怪我をしている手の上に、小さな光の粒子が降る

少しだけ痛みが和らいだ

すると、傍で待機していた少女、小悪魔の手から包帯を取り、傷の

上から巻きつけた

そして手の甲の方でギュツと包帯を結んだ

「これでいいわよ、即効性の治療薬は今在庫は無いし、それ以外だ

としても薬は無いわ、まあ数時間すれば傷はすぐに治るわよ、だけ

どね……」

右手を開いたり閉じたりして感触を確かめている私の手首を取った

「まだその能力が使えるまでに回復はしてないから、完治するまで

絶対に使わないように」

わかったぜ、と私が答えるよりも先に魔理沙が答えた

少しムツとしたパチュリーに言葉を続ける

「要するに、傷が治るまで私がちゃんと面倒をみなくちゃいけない

んだろ？」

「そうね、貴女が怪我をさせた本人なんだから、ちゃんと面倒を見

なさいよ」

「よし、それだけ確認できたら良いんだ」

首を傾げるパチュリー

魔理沙の腕の中で、私も首を捻る

世話になった、と言い残して、魔理沙は図書館を後にした
すると、どこに行くでもなく、自分の部屋の地下室に戻ってきた
今は今までと違って、すっかり暗くなった空に星が見える
すると魔理沙は私を傍らに座らせて、またもや瓦礫の中をぐそぐそ
とやり始めた

あつたあつた、と一本の箒を掘り出し、それに跨って浮いた

「おいおい、何をぼけつと見ているんだ？」

私は一体なにが起こっているのかさっぱりわからない
と、箒に跨った魔理沙が手を差し出してきた

「な？」

「……………うん」

今度は、その手をしっかりと握った

すうつと、魔理沙の横に浮かぶ

どれだけ久しぶりだろうか、空を飛ぶという感覚は

「なあフラン、外に出てみたかったんだろ？」

コクリと頷く

地上に出ると、闇に包まれた花畑が眼前に広がった

「今日は私が怪我をさせてしまったから、私が面倒をみなきゃいけない、そうだろ？」

再びコクリと頷く

門の出口まで飛ぶと、その前には仁王立ちしている咲夜と門番、紅美鈴の姿があった

「だからだ、私が外に行きたくても、ちゃんと面倒を見ないといけない、つまり……………」

咲夜がナイフを構える

美鈴が先頭の構えになる

「私が外に出るから、フラン、お前も一緒についてこなくちゃいけないってことさ！」

魔理沙が帽子の中からミニ八卦路を取り出した

そして、それを箒の後ろへと放り投げた

「ほら、しっかり掴まれよ！」

替符「ブレインングスター」

急いで魔理沙と手をつなぐと、一気に引っ張られた

ぐんぐんと咲夜と門番が、紅魔館が、遠くなつてゆく

そんなに長くは飛ばなかった

足元の森が途切れたところで、魔理沙が止まって口を開いた

「ほら、ここが紅魔館の外の世界、幻想郷だ」

「咲夜さん、逃げられちゃいましたけど、どうしましょう……」

「大丈夫よ、これもお嬢様の望みなのだから……」

「？」

後ろには広大な森が広がる

あちらを見れば大きな山が

向こう側には光が点在しているのが見て取れる

風が二人の間を、さも物珍しそうに吹き抜ける

草の匂いが鼻腔をくすぐる

空には満天の星空

いつだったか、戦った魔理沙の使った星じゃなくて、本当の星……

紅魔館も、外側から見たことが無かった

遠くに紅い点として存在している

「私にはそんなに遠くまで見えないが、フランだったら見えるだろ

？」

「うんっ！」

右を見ても左を見ても

空も地面も山の稜線も

全てが初めてだった

「魔理沙、魔理沙ー！あれ何？」

「んー、あの光っている場所か、あれは人里だぜ」

「じゃああつちは？」

「ほらほら、慌てなくても夜は始まったばかりだぜ？案内してやるから少しは落ち着けて」

「だって……」

「だって……」

「とつても……」

「とつても……」

「楽しいんだもんっ！」

魔理沙はニコニコ笑ってる

よっし、と筈に横乗りになる

「まず、どこに行きたい？」

「ん……じゃあ魔理沙が行きたいところ！」

「わかった、じゃあ付いて来いよ！」

二つの影が、東へと向かった……

「お嬢様、本当にこれでよろしかったのですか？」

紅魔館の一室

夜となり目覚めたレミリアの世話をしながら、咲夜が問う

しかし、レミリアは返事をしない

咲夜もそのまま沈黙を続ける

レミリアが着替え終わり、椅子に座る

咲夜が紅茶を差し出す

カップを受け取りそして一口紅茶を飲んだ

椅子の横にテーブルが置かれ、そこに紅茶のカップを載せた

そして、やっとレミリアが口を開いた

「私は、憎まれ役なのよ」

「お嬢様……」

「私にはフランを何百年も地下室に閉じ込めてきたという事実がある。今更私が外出を許してもどうにもならないわ」

「いえ、決してそんなことは……」

喋ろつとする咲夜を、レミリアは片手で制した

咲夜は口を急いで噤んで、すみませんと頭を下げた

レミリアは紅茶をそのままにして立ち上がり、部屋の扉に手をかけたそれに、と小さな声でレミリアが呟いた

その言葉は咲夜にも聞き取れなかった

(私よりも魔理沙に連れて行かせた方がフランも楽しいでしょう…
…)

その夜、幻想郷の夜空では沢山の流れ星と沢山の7色の星が観測された

(後書き)

多分、終わり方が物足りないと感じる人がいるかも知れませんが
・・・いや、居るでしょうね、自分も物足りません

しかし、睡眠欲には勝てないのです

この後、どんな騒動があったかは、読者の方々のご想像に委ねます
未熟な文章ながら、最後まで読んでくださってありがとうございます
でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9212p/>

幻想の夜に観測される流星と七色の星

2011年1月4日22時10分発行